

受注業務用のFAXサーバをMultiPort FAXへ 高機能な多回線FAX送信システムを短期間で構築

現在は急速な勢いで取引の電子化が進みつつあるが、その一方でFAXによる取引を行っている企業も多い。取引先の多い企業の中には、EDI等の電子化された取引システムとFAXサーバを組み合わせ利用しているところも少なくないはずだ。このような企業にとって重要になるのが、電子化された手段と連携したFAXシステムを、いかに効果的かつ効率的に実現するかである。今回紹介するシャープの事例では、FAXサーバをMultiPort FAX 3 Proに移行することでこの課題に対応。柔軟性と開発生産性の高いFAXサーバを活用することで、より戦略的なFAXの活用が可能になった。



シャープシステムプロダクト株式会社
ネットワークシステム第一統轄営業部
第一営業部 副参事
田中 利孝 氏



シャープシステムプロダクト株式会社
ネットワークシステム第一統轄営業部
第一営業部 課長
中西 大平 氏



シャープシステムプロダクト株式会社
西日本システム統轄
第2設計部 係長
梅本 康之 氏

取引先に対するFAXの表現力を 高めるためにFAXサーバを刷新

企業間取引の電子化に取り組みながら、一方でFAXを利用した取引も残していく。このような取引形態を続けている企業は現在でも少なくない。取引相手が大企業ばかりというのであればすべての取引を電子化するのも不可能ではないが、小規模な取引相手の中には電子化に対応するだけの体力がないケースも珍しくないからだ。

今回紹介するシャープも、このような取引形態を長年にわたって続けてきた企業のひとつである。同社が取引の電子化に着手したのは1980年代。当初はオフコンを利用したEDIからスタートし、1990年代半ばにUNIXサーバへと移行、さらに2002年にはEDIシス

テム全体の刷新を行っている。FAXサーバもEDI導入当初から導入しており、すでに10年以上も利用を続けている。

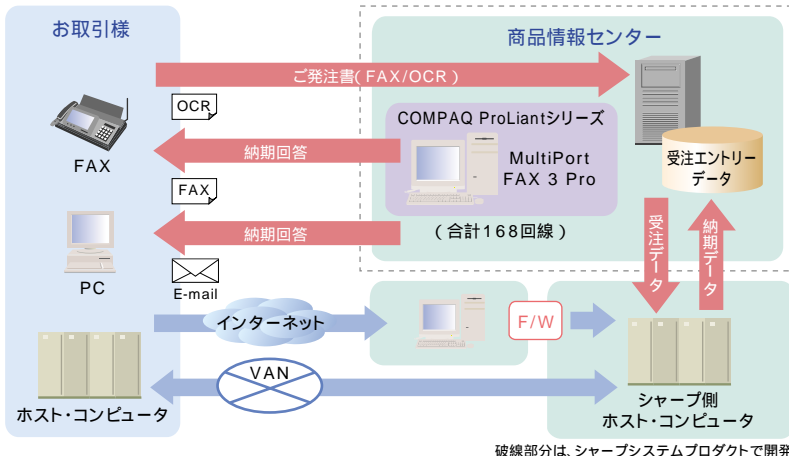
しかし長年にわたって情報システムを使い続けると、次第に時代の要求にそぐわなくなってくる。これはFAXサーバでも同様だ。シャープではふたつの問題が顕在化したという。ひとつはFAX紙面の表現力、もうひとつは処理効率の問題である。

「なかでも重要だったのがFAXの表現力をいかにして高めていくかでした」というのは、シャープの情報システムを担当するシャープシステムプロダクトの田中副参事だ。以前のFAXサーバでは基本的にひとつのフォントしか利用できず、罫線やロゴマークを紙面に盛り込むこともできなかったのである。「複数のメーカーから大量のFAXを受け取る販売

店では、表現力の乏しいFAXが他のFAXに埋もれてしまう可能性が高い。またFAXを見やすくすることで他社と差別化したいという要求もありました」

そこでシャープシステムプロダクトでは、2002年のEDIシステム刷新のタイミングでFAXサーバをリプレースすることに決定。最終的に「MultiPort FAX 3 Pro」を採用し、FAX送信システムの再構築を行うのである。

シャープの受発注システムの概要
電子化された受発注メカニズムの他に、FAXによる受注処理メカニズムも併用している。このうち納期回答などのFAX送信にMultiPort FAX 3 Proが利用されている。



多回線FAXサーバシステムMultiPort FAX 3 Proに関する詳細は.....

決め手はサポートと開発生産性 わずか2週間で既存コードを移植

FAXサーバのリプレースでシャープシステムプロダクトが最初に行ったのは、FAXサーバ製品の比較検討だった。まずは10製品を候補に挙げて機能面をチェック。多回線に対応し、開発効率が良く、さらにサポート体制が整っていることという条件で、製品を絞り込んでいった。シャープのFAX送信システムは合計168回線でFAXを送信しており、これだけの大量回線をサポートする製品はMultiPort FAX 3 Proを含め2製品しかなかったという。その後この2製品を試験導入し、実際のシステムで徹底的に比較。この結果からMultiPort FAX 3 Proの採用を決定するのである。

選択理由についてシャープシステムプロダクトの中西課長は次のように説明する。「まず大きかったのは開発効率の高さです。MultiPort FAX 3 Proには豊富なAPIが用意されているため、EDIシステムと連携したアプリケーションを短期間で構築できました。」さらに、シャープシステムプロダクトの梅本係長は「特に嬉しかったのは開発言語としてVisual Cをサポートしていることですね」と続ける。「以前のFAX送信システムはUNIX

上で稼働しており、開発はC言語で行われていました。これを今回はWindowsに移植する必要がありましたが、Visual Cをサポートしていればコーディングをやり直す手間が省けます。FAX送信用のアプリケーションは約10本あったのですが、わずか2週間程度で移植を行うことができました」

既存プログラムの移植に加え、今回のシステムでは表現力を高めるための追加開発も実施。全体の約4割が新規コードという構成になった。これらの開発も含めたシステム構築期間は、テストも含めて約2ヶ月余り。開発生産性はかなり高いといえるだろう。

しかしMultiPort FAX 3 Proの魅力はそれだけではない。サポートの迅速さも採用の重要なポイントだったという。「MultiPort FAXなら日本国内で開発されており、問題があってもすぐに国内で解決できる。またエスシー・コムテクスのサポート体制もしっかりしていました。今回のシステム構築から試験導入時、稼働後の運用まで迅速なサポートを行ってくれました」（中西課長）

複数サーバの負荷分散で 可用性と処理効率も向上

MultiPort FAX 3 Proへの移行によって、処理効率の問題も解決している。

以前のFAX送信システムは、可用性を高めるために2

台のUNIXサーバをセットにし、通常は2台のサーバ間で負荷分散が行われるようになっていた。これを東日本用と西日本用のふたつのサイトに設置、合計4台のUNIXサーバが利用されていたのである。しかし2台のサーバに接続され

シャープシステムプロダクト株式会社

1969年設立。システムのコンサルティングやプランニングから、開発、構築、サポートまで、一貫して提供するトータル・ソリューション・プロバイダである。未来を見据えた解決策によって、顧客満足を徹底して追及。品質マネジメントや環境マネジメントにも積極的に取り組んでおり、ISO-9001とISO-14001の両方を取得している。

ていた送信回線を全体として効率よく利用することが難しく、送信件数の偏りによって一方のサーバに送信処理が集中することが少なくなかった。

これに対して今回構築したシステムでは、東日本用に3台、西日本用に5台のWindows 2000サーバを導入。以前と同じようにサーバ間での負荷分散が行われている。以前のシステムと大きく異なるのは、複数のサーバにまたがった「回線グループ」を構成できるという、MultiPort FAX 3 Proの特長を生かしている点。これによって複数サーバに接続されている送信回線を、全体として効率的に活用することが可能になっているのだ。また回線グループ毎に優先順位を設定することで、一貫性のある優先制御も実現可能となった。なお東日本と西日本の間は専用回線で接続されており、一方のサイトがダウンした場合には、残りのサイトが業務を肩代わりできるようになっている。

「FAXサーバのリプレースによって、表現力だけではなくシステムとしての安定性も高まった」と田中副参事。今後は受注確認や納期回答といった取引事務だけではなく、新製品やイベントの案内にもFAXを活用することを検討しているという。

今回のシステムのように、可用性と処理効率、加えて多回線を考慮した場合、MultiPort FAX 3 Proは非常に有効な製品と言えそうだ。

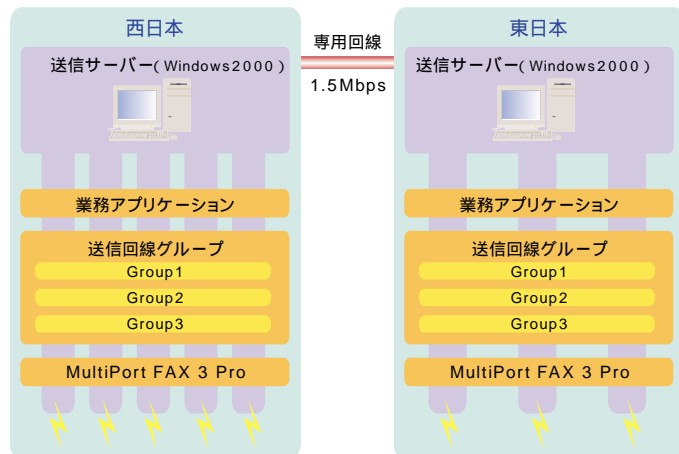


【問い合わせ】

エスシー・コムテクス株式会社

FAX送信サーバの構成

複数のサーバによる負荷分散とサイト間のフェイルオーバーによって、高い可用性と処理効率を実現している。



* (、 、 : FAXサーバのNo.)